





盲目に不<sub>レ</sub>すへじ。ヨダの牧伯等の心の中に謂んエサレムの居民のエホバに由て我力<sub>レ</sub>となく

おもへし彼等の右左にひかひうの周圍の國民を盡く焚か、エルサレム人のはエルサレムにてる本の

處ふ居ることを得へじ。エホバはヨダの幕屋を散ひたよてん是ヨダの家の榮ふよりエルサレムの居民

もうちのひにハビテのごとくなるべしまたハビテの家の神のとく御らに先だエホバの使のごとくな

るべしろの日には我三ルサレムの政<sub>レ</sub>たる國民<sub>レ</sub>てこぐ滅ぼすことを務へし。我タビテの家<sub>レ</sub>お

よびエルサレムの居民<sub>レ</sub>思ひ所禮の靈をうがんがん彼等の刺たりし我を仰き觀ひる。子のため

のひごとく之からために哭き長子のために悲しむがごとくされに痛く悲しまん。の日にはエルサレム

に大ある哀哭あらん是ハギドの谷あるハタデリシモ<sub>レ</sub>か在し哀哭のことくあるべし。國中の族の

おの別居て哀哭べすぞ。即ちダビテの家の族別れ居て哀哭さうの妻等別れ居て哀哭<sub>レ</sub>。ナムの家の

居て哀哭さうの妻等別れ居て哀哭べし。ナムの家の族別れ居て哀哭<sub>レ</sub>。ナムの家の族別れ居て哀

預言者<sub>レ</sub>にあらす地を耕へす者あり即ち我の若き時より人を買ひたりと。若これに向ひて然らば汝の兩手

の日には預言者等預言するに力ありてうの異象を益ん重て人を欺むため毛衣を纏てし。彼言なん我の

あひ身の傷の何不<sub>レ</sub>やと言わらば我が愛する者の家にて受けたる傷<sub>レ</sub>。おもに向ひて然らば汝の兩手

の間の傷<sub>レ</sub>など言わらば我が愛する者の家にて受けたる傷<sub>レ</sub>。おもに向ひて然らば汝の兩手

して火にいれ銀を熬分るごとくに之を熬分け金を試みるごとくに之を試みへじ。我の三分の一を携さへ

しエホバ言たま人全地の一人一分の絶これ死に。三分のうちの三分の一を我の三分の二を携さへ

して火にいれ銀を熬分るごとくに之を熬分け金を試みるごとくに之を試みへじ。我の三分の一を携さへ

餘の民<sub>レ</sub>邑より絶れし。三うの時<sub>レ</sub>から出でたり其等の國人を攻撃たまく在昔の軍陣の日には戰ひ

て橄欖山<sub>レ</sub>の眞中から西東に裂て甚だなる谷を成すの山の半に北に半に南に移るべし。汝らの我山

に逃る我神エホバ來りたまん。諸の聖者あんがまともあるべし。六日の日に光明あかるべく輝く者消え

なるべし。八つの日に活るエホバより出るの半の東の海に於の半の西の海ふ流きん。夏も冬も然るべ



其果すあるものうちの食糧の中に、三十九章云々なり。あんちらは又如何に頗しきことてあらすやでいひ且これを

贋福たり。萬軍のエホバこれをいふ、又あんちらの尊物足たる者病る者を携へ來れり。汝らかく獻物

を拂へ來れむわれ之どもんちらの手より受へけんや。エホバこれといひ玉へり。群の中には主あるに誓を立て

て拂あるものぞ。エホバに獻る詳偽者の謂はるべし。うち我名の列國に畏れらるべ事ある。

ナ誣目〇一〇世  
ム誣目〇一五〇世  
ム誣目〇一五〇世  
ム誣目〇一五〇世

さればり萬軍のエホバこれといふ

す又これを心にとめず我名に榮光を歸せず。心われ汝らの上に謂を來らせん。又あんがらの祝福を謂はん。

われすでに此等を謂へり。汝らこれをして心にとめりしに因てあり。三罪謂あんちらのために種をいましむ

わられすでに此等を謂へり。汝らこれをして心にとめりしに因てあり。三罪謂あんちらのためには種をいましむ

命令をあんちらに下し與ふるそ我契約をしてレに保た失めんためあるを汝ら知るべし。萬軍のエホバ

こをいふ。わの彼と結びし契約は生いのち平安である。我このれぞ彼に興へし。彼にわれぞそれが

命ひづけられ。汝らの儂養を汝らの面上に撒き。汝らこれとどもに携へられん。此の

めん。また養すあらむ汝らの性養を汝らの面上には撒き。汝らこれとどもに携へられん。此の

われすでに此等を謂へり。汝らこれをして心にとめりしに因てあり。三罪謂あんちらのためには種をいましむ

わられすでに此等を謂へり。汝らこれをして心にとめりしに因てあり。三罪謂あんちらのためには種をいましむ

命ひづけられ。汝らの儂養を汝らの面上に撒き。汝らこれとどもに携へられん。此の

ハ百姓世〇一〇年中〇一〇年正月〇一〇年正月

ヨ申世〇一〇年正月〇一〇年正月

ハ百姓世〇一〇年中〇一〇年正月〇一〇年正月

コ正月〇一〇年正月〇一〇年正月

トヘ耶世〇一〇年中〇一〇年正月〇一〇年正月

ダ百姓世〇一〇年中〇一〇年正月〇一〇年正月

トヘ耶世〇一〇年中〇一〇年正月〇一〇年正月

ク又公儀をとりて我しへもにあゆみ。又多の入を不義より立罷らせたり。夫れ祭司の口唇に知恵を持べ

が爲なり。かれぞそれを懼れるが爲の前にをのゝけり眞理の法倣の口に在て不義の口唇にあらず。彼本安

命ひづけられ。汝らの儂養を汝らの面上に撒き。汝らこれとどもに携へられん。此の

ハ百姓世〇一〇年中〇一〇年正月〇一〇年正月

トヘ耶世〇一〇年中〇一〇年正月〇一〇年正月

ダ百姓世〇一〇年中〇一〇年正月〇一〇年正月

トヘ耶世〇一〇年中〇一〇年正月〇一〇年正月

ク又人彼の口より法を詮諭へらる。祭司の萬軍のエホバの只一を造りたまひしにわらず。彼の兄弟

にてもまだ然りつまに又あんちらのことをせり。即ち涙て遺と嘆ともしてエホバの壇をあはず。此のみ

を。士あるものぞ事ふる者をもヤコブの星よりの不吉たゞもん萬軍のエホバにことをあてんか。ハ

ル。少もあらむぞ事ふる者をもヤコブの星よりの不吉たゞもん萬軍のエホバにことをあてんか。ハ

ル。故に彼ものぞ献物を願みすよたことまで汝らの手より悦び納たよもざるなり。汝らのあは故不や

たり。故に彼ものぞ献物を願みすよたことまで汝らの手より悦び納たよもざるなり。汝らのあは故不や

レ 聖〇一〇年正月〇一〇年正月

ダ選〇一〇年正月〇一〇年正月

シ 聖〇一〇年正月〇一〇年正月

ソ 聖〇一〇年正月〇一〇年正月

ル 聖〇一〇年正月〇一〇年正月

ミ 聖〇一〇年正月〇一〇年正月

ダ選〇一〇年正月〇一〇年正月

シ 聖〇一〇年正月〇一〇年正月

ル 聖〇一〇年正月〇一〇年正月

ミ 聖〇一〇年正月〇一〇年正月



